

「私のためのよみがえりの主」

ルカ 24章 1-12節

イースターおめでとうございます！ 今日の説教題は「私のためのよみがえりの主」です。これだけだとキリストはすべての人のためによみがえってくださったのではないか！ ちょっと利己的な感じがすると言われそうです。そういうことではなく、「すべての」というと十把一絡げのようで、どこかの誰かがという感じがしないでもありません。「すべての」という場合、真っ先にこの私のために主はよみがえってくださったことを覚えるためにあえてそのような題といたしました。

さてイエスは、金曜日の午後三時、十字架の上で息を引き取りました。死んで、墓に葬られました。しかし、イエスはいつまでも死につながれているお方ではありません。日曜日の夜明けとともに、死を打ち破って、復活されたのです。イエスのお体は、十字架の傷跡を残してはいましたが、もはや死ぬことのない体となって、墓場から出て行かれたのです。

イエスのご遺体に香油を塗るため、墓にやってきた女たちに御使いは言いました。「あなたがたは、なぜ生きている方を死人の中で捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。」これが、御使いたちによって告げられたイースターのメッセージでした。「よみがえられた。」これがイースターのメッセージです。教会は、二千年間、このメッセージを信じ、守り、このメッセージを伝え、教え、そしてこのメッセージによって生かされ、成長してきました。「よみがえられた。」それはたったひとことばのメッセージですが、それを聞く者に、慰めと力、希望と勇気を与えてきました。この言葉のゆえに殉教することも厭わない人が数多く起こされてきました。「主はよみがえられた」このメッセージが今日の私たちにも同じ慰め、力、希望、勇気を与えるものであることを、この朝、一緒に確認して、このイースターの日を歩み出したいと思います。

ところで最近では葬儀においてキリスト教信者、未信者を問わず、ほとんどすべての人が、「天国」や「神さま」ということばを口にされます。普段の生活で特別に神を意識することがない人でも、心の奥底では「神」がいらっしゃることに「天国」があることを認めているということだと思えます。また昔もそうだったのかも知れませんが残虐非道な事件や犯罪、また不条理なことを見聞きするにつれて、もしも天国がなければこの世は、あまりにも、不公平なところだと思えます。ですから誰であっても、神がいらっしゃるはずだ、天国はなければならぬのだという思いを持つのは当然です。聖書に「神はまた、人の心に永遠を与えられた」（伝道 3:11）とあるように、神は、すべての人に神を思い、天国を思う思いを与えられたのです。

しかし、人間は天国のことを想像できたとしても、それを確信することはできません。天国があること、死後の世界があることを確実に教えてくださるのは、死から復活されたイエス・キリストの他ありません。イエスといっしょに十字架につけられた強盗は、その場でイエスから天国を約束していただきました。死の間際でさえ、信仰を持った者が天国に迎え入れられるなら、イエスと共にこの地上を歩んだ者がイエスのおいでになる天国に行けないことはありません。創世記に「エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった」（創世記 5:24）とあります。神のおられるところ、そこが天国です。エノクは地上で天国を歩きました。彼にとって、地上から天に移ることはごく自然なことだったので。私たちの歩みもそうでありたいと思います。死をうちやぶって復活され、「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」（マタイ 28:20）と言われるイエスと共に歩む、それはなんといい慰めであり、恵みでしょうか。「主は、よみがえられた」という、イースターのメッセージが多くの人々の心に届き、慰めとなることを祈ってやみません。

「主はよみがえられた」「主は生きておられる」。このメッセージは人々に慰めとともに勇気を与えました。イエスの弟子たちは、十字架で死なれた後、このメッセージを聞くまでは、何をどうしてよいかわからず、恐れの中にありました。ヨハネ 20:19 によると「弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあった」とあります。自分たちが従ってきたイエスがあんな目にあったのです。同じことがいつ、自分たちの身にふりかかっても不思議ではないと思ったのでしょうか。弟子たちは戦々恐々として、エルサレムの、もしかしたら、最後の晩餐を守った家の一室に、鍵をかけて隠れていたのです。十二弟子の中でいちばんの切れ者であったカリオテの人ユダは、イエスを裏切り、自殺してしまいました。今まで指導力を発揮していたペテロはイエスを知らないと言って否み、今は見る影もなく、部屋の片隅にうずくまっています。先生も、リーダーもなくした弟子たちは、どこに行ってもなにをして良いかわからず、閉じ籠っているばかりでした。

女の弟子たちは、男の弟子たちよりもましでした。イエスのご遺体に香油を塗りに墓にまで出かけたのですから。それは悲しみの中であって彼女たちが主イエスのために出来ることであり、それが絶望の中での唯一の慰めでもありました。しかし、彼女たちがしたことは的外れなことでした。御使いが言ったように、それは「生きている方を死人の中で探す」ことだったからです。墓場は死んだ人のいる場所です。生きておられるイエスがそこにおられるわけがないのです。彼女たちは途方にくれてしまいました。

信仰は感情を除外しません。女たちはイエスの痛みを見て、大いに悲しみました。イエスを亡くして、どんなにわびしく思ったでしょう。イエスを慕う心は美しいものでした。それらの感情は信仰のあらわれの一つだったと思います。しかし、信仰は単に心情的、感情的なものではありません。それは論理的なものでもあります。歴史の事実に基づき、その事実の意味を教える神のことばに聞くことから信仰は始まります。女たちは、「よみがえられた」というイースターのメッセージを聞いてもただ恐れるばかりでした。しかし、御使いから「お話しになったことを思い出さない。人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない、と言われたでしょう」(24:6-7)と言われとき、「女たちはイエスのみことばを思い出し」(24:8) たのです。イエスのことばに立ち返ったとき、彼女たちは、主が復活を預言しておられたことを思い出しました。そして、その主のことばによって、空の墓が何を示しているかを悟ったのです。

「よみがえらえた。」このひとことが、女たちに信仰の力を与えました。女たちはもはや自分たちの先生を亡くした悲しみにとどまっていませんでした。女たちは、これからのち、亡くなった先生を慕っては、毎日のようにお墓参りに来るつもりだったのかもしれない。しかし、そんな感傷は消え去りました。自分たちが愛し、慕い、従ってきたお方は、復活され、今も生きておられる。イエスは主であり、王であり、神であることが分かったからです。

男の弟子たちは、復活の知らせを聞いても、それを「たわごと」だと思って、信じませんでした。たしかに、イースターのメッセージは、すぐには人々には受け入れられないメッセージです。使徒パウロがアテネの町でキリストの復活を語ったとき、人々はそれをあざ笑ったり、「このことについては、またいつか聞くことにしよう」(使徒 17:32) と言って、パウロを相手にしませんでした。今も、多くの人には「たわごと」なのかもしれません。しかし、そんな男の弟子たちも、この後、復活されたイエスから聖書のことばを解き明かされたとき、イエス・キリストの復活を理解し、信じるができるようになりました。

イースターのメッセージは聖書に深く根ざしたメッセージです。「あなたは愛されている」「互い赦し

合いましょう」「前向きに生きましょう」などといったメッセージは誰にでも受け入れられます。しかし、そうしたメッセージは、かならずしも、神やイエス・キリストを必要とはしません。それがそのまま神のことばのメッセージではありません。聖書のメッセージは、「聖なる神が罪びとを愛してくださった」、「私が赦されるためにキリストが死んでくださった」、「私が力と希望をもって生きることができるのは、キリストがよみがえられ、私の内に生きてくださるからである」と語ります。それは、私たちに神と主イエス・キリストへの信仰を要求します。聖書のメッセージは、「私たち」、「私」へのメッセージですが、それは、「あなたは素晴らしい」、「私には出来る」など、「人間」が主語のメッセージではありません。「神が世界を創造された」、「神が世界を愛された」とあるように「神」が主語のメッセージです。(イエス・キリストはよみがえった)、「イエス・キリスト」が「主語」なのです。「私」がどこに来るかというなら、キリストは私のためによみがえられたということです。このメッセージが、生きる目的を見失い、的外れなことをしていた弟子たちを変えました。今日の私たちも、このメッセージによって変えられ、生かされるのです。

主イエスは、ペテロが「あなたは、生ける神の御子キリストです」との信仰を言い表わしたとき、「わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません」(マタイ 16:18)と言われました。初代教会は、迫害を受け、数多くの殉教者を出しました。しかし、よみがえられたキリストを信じる教会は、「ハデスの門」(死)にも打ち勝って力強く世界に広まっていきました。そのようにして、教会は世界の隅々にまでキリストの復活のメッセージを、身をもって証明し、それを届けてきました。それによって、どんなに多くの人々が、希望を見出し、生きる力を得てきたことでしょうか。キリストの復活を祝うこの日に、私たちの身近なところで、また、世界のいたるところで、どんなに多くの、悲しみや嘆き、絶望の中に沈んでいた人たちが、キリストの復活の力によって、その人たちもたましいのよみがえりを体験していることでしょうか。私たちも、この慰めと力に生きるため、「主はよみがえられた」とのイースターのメッセージが自分のものとなりますようにと、心から祈り、願い、求めましょう。そして、「主はよみがえられた」という、この希望のメッセージをまわりの人々に知らせていきたいと思えます。